
教室戦争 -Class Room War-

鎖蛞蝓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

教室戦争 - Classroom War -

【Nコード】

N2938Z

【作者名】

鎖蛞蝓

【あらすじ】

日本は平和主義の方針で進めていたが、戦争を放棄した代わりに国内の防衛力も落ちていった。

政府の決議により、とある公立高校にて試験的に導入した「基礎体力強化時間」。

生徒の中から選ばれた者が「実験者」としてバトルロワイヤル形式で互いに争うということが秘密裏に行われていた。

前置

俺はその日、「戦場」のど真ん中に立っていた。

|| 教室戦争 ? ||

「やっと着いたか…ねむ…」

札幌から新幹線で何時間かかっただろうか。

多少の疲労感と共にこのでかい車体が止まるのを感じた俺は自分の上半身と同等の大きさぐらいの荷物を抱え、東京の地に足をつけた。

やはり札幌の駅よりでかい。気がする。
いやでかいな。まだホームしか見えてないからなんとでも言えんが。

「やっぱり飛行機にしときゃよかつたかな…」

小さい頃（4歳くらいだったか。妹がまだ2歳だったとき）に親との家族旅行で初めて飛行機に乗り、あまりの耳の痛さに13年経った今でもトラウマものだったので、今回の父さんの転勤による札幌⇄東京間の移動も家族の中で俺だけは新幹線をセレクトした訳だが。

…いや、もう着いたし過ぎたことは気にしないのが一番だって誰か言ってたな。うん。

「えつと次は…」

とりあえず通過点である東京に着いたはいいが父さんの転勤先は神奈川。

4歳以降北海道から出たことがなかった俺なので、

「…川崎行きの切符はどれを買えば」

初歩の段階でつまずいていた。

いや待て落ち着け俺大丈夫だ道産子といえども札幌生まれ札幌育ちだ何年間札幌に住んでいたと思っっている路線図くらいそれなりに詳しい筈。はず。

それに考えてもみるよ見た目的にも年齢的にもでかい荷物を持っていることも全てふまえて周りの何も事情を知らない一般ピーポーからしたら俺は上京したての高校生つばいじゃないか。そんな見た目の奴が「すいませーんどの切符買えばいいんですかー」なんて聞くのはあまりにも恥ずかしすぎるいやお前等がどう考えていようと少なくとも俺は 恥 ず かし い。 どうしたものが。

俺は駅の中にあるファミマにてジャンプを立ち読み（するふりを）しながら一人脳内戦争をおこしていた。するとその時。

「あれ？らぎじゃない？」

俺の後方左側から突然聞き慣れない声で名前を呼ばれた。気がした。

しかし俺は「らぎ」なんという痛々しいあだ名を持った覚えはないのだがと考えたところでそういえば数年前そう呼んでいた奴が約一名いたなと考え

とりあえず後ろを振り向いてみる

「……………どなたですか」

知らない人だった。
正確に言えば見覚えのない人だった。

「？君、霧ヶ崎くんじゃないの？霧ヶ崎柊君でしょ？」

確かに親から授かった一生付き合っただけならならぬ相手一
号はそれで合っているが話しかかみ合っていない

「だから俺はあんたが誰だって聞いて「やっぱりぎじやんなんだ」

人の話を遮るな

「あたしの事忘れちゃった？咲晴だって、五月咲晴。」

……………さつきさくは……………？

「……………！もしかしてさくはか……………？小六の時転校した……………五月……………？」
「だからそう言ってんじやん。まじで忘れられてたか」

いや、忘れてたわけでは……………

五月咲晴。

札幌南区のマンションに住んでいた霧ヶ崎家の隣に引っ越してきた家族の一人娘で所謂俺の幼馴染みに該当する人物である。

2歳下の俺の妹とも仲が良く、放課後や休日は俺、妹、咲晴の三人で遊ぶことが多かったように思う。

当時の咲晴の髪型といえば、肩にかかるかかからないかくらいのベリーショートで、顔つきも性格も俺より男らしかったという記憶が残っている。

But現在。

「お前……髪のびたな……」

咲晴の髪は腰までのびており、側頭部で直径約10センチ程のリップンで結ってあった。

おいおいイメチェン成功しすぎだろ。渋谷でもあるいていれば20歩ごとくらいにどっかのモデル事務所にスカウトされてるんじゃないかこいつ。

「そう?…ああ、もう君と会わなくなってから五年も経ってるんだから、そりゃ髪ものびたくなるって」

「髪が意志を持ったのかというつつこみはおいといて、何故お前は

「ここにいる？今日は日曜だし通学してわけでもないだろう？」

服装からしてこのカジュアルな服が制服でないかぎりこれから学校ということはないだろう。

「え、だって昨日東京来るって言ってたじゃん。お迎えよお迎え」

なんと。

知らぬ間に俺はこの幼馴染みに東京行きの事実を告げていたらしい。

「…ちょっと待て。五年間声すら聞いていないような奴にどうやって言えると…」

「だから、昨日チャットで言ってたでしょって」

「チャットだと？」

札幌で通っていた高校に小学校からの知り合いはいない。つまり奴にこのことを告げられる奴はいない。

こいつと文通でもしていたかと思っただがそんな心当たりもない。妹にもそんなそぶりは見られなかった。

そうなるとチャットしかあり得ないことは確かなのだが、最近顔をだしているチャット相手に女はいなかったように思える。

「でしようね。あたし男のふりしてたし」

「なんの為に…」

「男のほづが色々と便利なのよ。変な奴に絡まれることもないし」

「HNは？」

「紅竜」

あの厨二臭かった人が。お前だったんだな。

ていうかあの名前こうりょうって読むのか。中国人みたいな名前ですね。

「細かいことはいいじゃん。なんだっけ、高校あたしと同じところよね？家も川崎？」

「あ、おう」

「切符は？もう買った？」

まだで悪かったな

「怒るなって。じゃああその券売機で買ってきなよ。どうせいらぬい羞恥心で人にも聞けなかつたんでしょ？」

うるせえ

という課程を経て現在自宅周辺。

「ん？」

「あ？」

目の前にはただの一戸建て。

その左隣には立派な一戸建て。

そして咲晴はただの一戸建ての左隣を指さして

「あたしんちここなんだ。また隣じゃん」

笑いながら上京したての高校生みたいな奴に向かってそう言った。
ていうか俺に言った。

何故だ数年前は同じマンションに住んでいただろ格差社会か。

「お母さんがデザイナーやってるのは知ってるよね？…二年くらい前にちよつと成功したらしくてさ。まああたしには関係ないんだけど」

関係大ありだろ。資本主義社会に感謝しろちくしょうめ。

東京で一戸建てを買えたってだけで俺の家だっけかかなりの金持ちだと思っただが甘かった。上には上がいるもんなんだと思っ知った17の春である。

「…うん、とりあえずその荷物置いて、今日はもう引っ越しの片付けに徹したら？明日から学校来れるんだよね？」

「ああ。というか、父さんから行けとの指令がでているんだ」

「…そっか」

そう言っつて咲晴は自らの衣食住の場を見つめながら、晴れ渡る空の下の桜の様な顔で笑った。

出会

「教室戦争？」

「ふむ」

シャツは若干青がかっている。ネクタイは赤っぽい橙っぽい感じに藍色のストライプが斜めにかかっている、ジャケットは青に近い緑。下も然り。

「ださい気がしないでもないが、私服登校の学校ではないので仕方がない。」

「もつとも、私服登校の場合俺のセンスが問われるわけで、そう考えると制服登校というのは一種の救いかもしれないとかなんとか考へながら初めて袖を通したその制服からは、真新しい布のにおいがした。」

「兄さん遅いです。そろそろ家を出なければ遅刻してしまいます」

「おう」

中学の制服もブレザーらしい。俺としては中学生にはセーラー服を着て欲しかったのだが。

「何を言っているんですか。早く朝食を食べてしまってください」

俺は適当に返事をして我が妹お手製のトーストの目玉焼きのせけチャップがけを食べる事にした。

何故この妹は15歳になっても目玉焼きにケチャップをかけるクセが抜けないのか。そろそろ醤油かソースにかえても良い頃だと思っっているのは俺と父さん共通の見解だろう

と、そこまで考えたところで

「…あれ、父さんは？まだ寝てるのか？」

「はい。昨日はお一人で片付けを頑張っていましたから。…誰かさんがすぐに寝てしまったせいで」

悪かったって。

しかし昨日は仕方なかったんだよ

「言い訳は求めています。私はもう行きますのでお皿洗っという下さいね」

「はいはい…」

そう言い放ち、牛乳を一気に喉に流し込んだ妹は、写真の中で笑っている自らの母親に「いつてきます」と中学生らしさの残る笑顔を零して家を出た。

俺は一つ溜息をついた後に妹に命じられた皿洗いをほどなく遂げ、ソファにて眠りにについている我が父親に起きると一言言ってやるうかと思っただがこの父さんがここまで眠っているということは今日は仕事はないのだろうと踏んで、俺は無言のまま我が家を後にした。

「お、らぎやつと出てきた。急げ遅刻するぞ」

家を出ると咲晴が門の前で待つており、俺の左腕を掴みそのまま直進を……

「って何故お前がここに」

「んなことどうでもいいから早くしてよバス乗り遅れる」

どうやら思いも寄らぬ形で女子と一緒に通学することになったようだ。あとどうでもよくはないぞ咲晴。

この後変なラブコメ展開がなければいいが。俺はラブコメは苦手なんだよ。

とかなんとか考えている間にとりあえずバスには間に合ったようで、咲晴に引つ張られるようにして俺はバスの車内に乗り込んだ

「ほらやつぱ座れるとこないじゃんらぎのアホ」

何故アホ呼ばわりされねばならないのか。

「らぎが早く家出てきてくれれば座れたんだってばバカ」

バカでもアホでももうなんでも好きに呼んでくれ。

咲晴と中身のない会話をしていると、俺の目の前 正確には眼下にいる女子高生が漫画のようにクスクスと笑い始めた。

普段の俺ならばこのわざとらしさにいらつときていたところだが、その女子高生は容姿からして「漫画のように」と形容しても問題はないような見た目をしていて

つまりはクスクスが似合っていたということさ。おさげに眼鏡というガリ勉ルックをしていてここまで可愛い子なんてそうそういないだろ？

「あれ、三好さんじゃん。おはよー」

隣から俺の眼下に向けて朝の挨拶が交わされた。

「…咲晴、知り合いか？」

「まあね」

「おはよう五月さん。…あなたは…転校生、よね？おはよう。それと初めまして。五月さんのクラスメイトの鈴蘭といます。」

なるほどクラスメイトか。

それにしても高校生同士でこの敬語って。

とりあえずここまで丁寧に挨拶されたらシカトするわけにはいかないよな。というかシカトする気は無かったのだが。とか誰に宛てた言い訳だかわからんが俺は頭の中でそう考えたあと、その女子高生に軽く会釈をした。

「三好さんうちのクラスの委員長なんだよ」

ほお。

そして何故お前が得意気にしているのか理由を聞こうか。

三好さんとやらと出会ってから十数分後にバスはとある県立高校の前で止まった。

県立仙泉高校。「仙泉」とかいて「せんせん」と読むそうだ。

北海道にいるところにこの辺の地名について結構勉強したのだが、転校先の学校であるこの「仙泉」という地名は無かった。

県立だから地名から学校名をつけたのだろうと思っただが俺の考えは違っていたようだと思ひ知らされたのを覚えている。

それにしても大きい校舎だ。生徒数何人だっけな。

「下駄箱はこっち。上靴、ちゃんと持ってきたでしょ？」
「あたり前だ」

「だよ。…とりあえず、ここ空いてるから外靴置いとけば……
つと、お、北町せんせい！おはよー！」

咲晴の性格は5年経った今でも変わっていないらしい。社交的で
明るいなんで俺と正反対すぎて羨ましい限りだよ。

「こら五月。先生には敬語を使えといつも言ってるだろ。……ん？
そっちは……」

「…あ、今日転校してきました…あの、…」

「霧ヶ崎くん！もー先生なんだからちゃんと知っててよ！」

「………！…ああ…、…霧ヶ崎君か。北海道から転校してきた子…
だっけか？」

「え、…はい」

俺が目をそらしつつ質問に応答すると北町先生と呼ばれた20代
後半くらいの男性教師は「そうかそうか」と言いながら目の前の人
見知りの男子高校生の頭を撫でた。

…頭触られるのは好きじゃないのだが。

「よし、五月は教室へ戻れ。霧ヶ崎は……とりあえず俺と一緒に職
員室へ行こうか」

「はい」

「はい。じゃあね、らぎ。また教室で」

教室でって。まだ同じクラスなのかもわからないのに。

咲晴は通学用と思われる鞆を背中の後ろで左右に揺らしながら階段を二段飛ばしで上っていった。

「…職員室の場所はわかるか？」

「あ、いえ…」

「そっか。じゃあ俺についてきて」

そして俺は北町先生に連れられ、学校の職員達の巣窟へと向かった。

校舎は内装外装ともに新品に近い感じがした。

というか、実際この校舎は出来て2、3年程度しか経っていないのだろう。学校の廊下の壁に必ずあると言っても良い落書きが全く見あたらない。

しかし代わりに、壁には何かで切ったような跡、床には数力所焦げ跡がついている。なんだこれ。

「あの、先生…」

「さあ着いたぞ。霧ヶ崎。」

なんだろう最近人の話を遮るのが流行っているんだろうか。俺が流行に乗り遅れているのだろうか。

嘆息しつつ俺は顔を上げた。

すると。

「……………なんですか、これ…」

そこは職員室というにはあまりにも狭く、あまりにも質素だった。その部屋に、職員はもちろん、机、椅子、窓すらもなく。

天井、床、壁、全てが白く染め上げられている。

しかしひとつだけ、異質なものが置いてあるのが見えた。

目の焦点があわなくなっている俺の横を、北町先生は何事も無いように通り過ぎ、その異質なもの一辺が10センチ程の箱のようなものを持ち、俺の前に持ってきた。

「霧ヶ崎くん」

その箱の中には時計のようなものが入っていた。

先生はそれを取り出し、俺の腕につけながら、目の前の動揺しまくっている男子高校生に向かって、こう言った。

「君には基礎体力強化時間実験者になってもらう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2938z/>

教室戦争 -Class Room War-

2011年12月11日20時57分発行